Vol.．111　山里で賑わっている店 Part2　（平成 19 年 5 月 10 日）

私のメッセージは商店街・食品店の事が多い特長があります。
それは大型店等によって地元商店街はどう生き残れるか？との大きな課題があるからであります。

（イ）先日或る勉強会で経済産業省の中小企業支援政策の委員長山口義行教授に「イオンが出来てきたらそのまち周辺はどうなりますか？」と質問すると「ひとつのまちが無くなるでしょう」と事もなげに答えが返ってきました。

（ロ）昨年６月にＩＭＩが金田東地区の開発計画を発表し、文中に「まちづくり三法改正によって旧市街地を活性化させようとしてもそれは無理だ。商いで街を活性化させようとするなら諸名物飲食店以外には考えられない。歴史の流れに逆らえば自滅と同じ」と書かれていました。

例えば水戸内原へ昨年開店したイオンは、年商２８０億円が目標です。木更津築地はその1.5倍の広さですので単純に試算すれば４００億円。南関東圏の一人当年間消費額は凡そ２１０万円位。大型店の販売臨界点は６％ですから、例えばイオンで消費する金額は年間一人当たり13万円くらいと算出されます。あくまで参考ですが、とてもとてもの数字になってしまいます。

現実を直視して私たちが生き残るには、観光立地と大型店によって流入する巨大な人口を受けるかを考え、議論するのではなく決断する時であります。

商工会議所は予測される次の課題に対して、情報・提案させていただき、会員の皆様が「もうだめだ」と思わないで、「まだ大丈夫だ！これからだ！！」と希望が持てればと願いこのメッセージを書いております。

さて前号に続いて山里で元気なお店ですが、４１０号を南下すると安房丸山の小野治郎右衛門誕生記念講演を目印に右折して、ややしばらく狭い山道を家があるのか心配しながら行くと、やがて道が終わりそこに「隠れ屋敷典膳」が黒々と忍者屋敷の様に現れました。

今、多くの人々は何故嶺岡山脈の奥深い不便なところを求めてやってくるのだろうかと思わざるを得ませんでした。私の家から凡そ１時間、４６５号を夷隅鉄道に沿って西畑小を右折するとやがて平沢へと入ります。ここには友人のルイス クラークと明賀さんがいて窯出しの日は都内、神奈川からファンでにぎわっています。この平沢は京都に告ぐ筍は美味と評判ですが、この大竹林の中に「童子」「竹仙郷」の２軒があります。山肌から落ちる水、手掘りの長い隧道の向こうに京都か鎌倉の世界へと突然入り込んだ錯覚と出会います。小糸のカントリーガーデンも広い田園の中の洒落た店。亀山のそば屋京兵衛も「そば通」の間では有名です。

圏央道が４１０号へつながり、館山道が７月に完通しますと、恐らく南房総へは３千万人の観光客が出入りすると思われます。ディズニーランドへも、山奥の茶屋へも団体客から、家族、友人単位でそれぞれの好みの旅をする時代へと変わったようです。

今経済産業省では、何人かよき仲間で共に知恵と力を出し合って協業する人達に「新連携支援作戦」が展開されています。審査が通れば３千５百万円返済しなくてもいい補助金が出ます。全国のデーターを見ますとこれらの決定権を握っているのは「おかみさん」だそうです。「君津のおかみさん」に大きな期待をいたしております。